

|                  |                                                                                                                                                                                                                   |
|------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 儒医山本封山の読書と和歌と：『読書室筆記』研究序説                                                                                                                                                                                         |
| Sub Title        | An analysis of Confucian physician Yamamoto Houzan's diary Dokushoshitsu hikki : reading practices, kokugaku thought, and waka poetry in Kyoto during the mid-Edo period                                          |
| Author           | 一戸, 渉(Ichinohe, Wataru)                                                                                                                                                                                           |
| Publisher        | 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫                                                                                                                                                                                                   |
| Publication year | 2025                                                                                                                                                                                                              |
| Jtitle           | 斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.59 (2024. ) ,p.81- 111                                                                                                                                         |
| JaLC DOI         |                                                                                                                                                                                                                   |
| Abstract         |                                                                                                                                                                                                                   |
| Notes            |                                                                                                                                                                                                                   |
| Genre            | Departmental Bulletin Paper                                                                                                                                                                                       |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20240000-0081">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20240000-0081</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 儒医山本封山の読書と和歌と

## ―『読書室筆記』研究序説―

一 戸 渉

はじめに

山本読書室は平安読書室とも称し、近世中期に山本封山（一七四二～一八一三）が京都に創設した儒学・医学・本草学の私塾である。油小路五條上ル上金仏町に所在し、明治期にいたるまで百年以上にわたって学塾として活動を存続した山本読書室の旧蔵資料は、かねてより岩瀬弥助の収集にかかる西尾市岩瀬文庫所蔵のものが知られており、また近時、京都府立京都学・歴史館（以下、歴史館）に寄託された資料群（以下こちらは山本読書室資料と総称）も二〇二一年より閲覧調査が可能となり、

これらを用いた研究がさまざまに進められつつある。<sup>①</sup>

歴史館に寄託されている山本読書室資料中に、山本封山が明和九年（一七七二）から天明六年（一七八六）までの十五年間に書き綴った『読書室筆記』と題する全十八冊におよぶ日録が存在する。<sup>②</sup>この『読書室筆記』を繙読してゆくと、封山は西本願寺家臣としての業務のかたわら、皆川淇園や村瀬栲亭といった漢学者から、富士谷成章や礪波今道、海量といった国学者までじつにさまざまな人物と接しながら、多種多様な書物を読み、書写し、また会読や講義を行っている様子を見ることができ、また以下に述べてゆくように、それらの書物のなかには、和刻本および明版・清版の儒書や医書などの漢籍はむろんのこ

と、本邦の和漢学者の各種著述、あるいは『雨月物語』『両剣奇遇』のような初期読本、さらには中国の稗官小説の類すらも含まれている。

『読書室筆記』は西本願寺の寺院組織の末端にあった人物の記録としてはもちろん、近世中後期を生きた第一級の知識人の読書録として、また諸名家との交遊録として、さらには和歌や漢詩をはじめとする文芸活動の記録として、じつに豊かな内容を持つ。当該資料については存在自体の報告はなされているが、これまでのところその内容について具体的に立ち入った議論を行った論考は存在しないようである。そこで本稿では、『読書室筆記』の交遊録ならびに読書記録としての側面に主として着目し、そこに記された書物や人物をめぐるさまざまな記述が、この時代の知識人社会の諸潮流や文化的な実践とどのような関係を取りむすんでいるのかについて、とりわけ国学ならびにそれと関係する記事を中心に考察してゆく。

## 一、山本封山と『読書室筆記』

まず『読書室筆記』の著者である山本封山について、先行研

究を参照しつつ簡略に整理しておく<sup>③</sup>。

山本封山は越中高岡（現在の富山県高岡市）の日下庄兵衛の次男として寛保二年（一七四二）に生まれた。名は有香、字は蘭卿また中郎、封山などと号した。実家の日下家は屋号を茶木屋といい、代々の当主が町年寄などの役職を務める当地の有力町人であった。幼少期には儒者室鳩巢の孫弟子某に学問の手ほどきを受けたと伝えられる。鳩巢はすでに享保十九年（一七三四）には没しているから、封山との直接の接点はないが、鳩巢は加賀藩にながく仕えていたこともあって前田利長によって開かれた高岡の地にも鳩巢の門流に属する人物がいたのであろう。封山は医学を曲直瀬道三の門流某、上京後には古医方の吉益東洞（一七〇二〜七三）に、また詩文を武田梅龍（一七一六〜六六）に学んだとされる。『吉益家門人録』宝暦十二年（一七六二）条に見える「日下伊織 一名香建字蘭卿改中郎<sup>（ついで）</sup> 越中高岡<sup>④</sup>」は封山のことであるから、吉益東洞への入門は彼が二十一歳の時であった。この頃には上京を果たしていたか。

封山の人生におけるおおきな転機となったのは西本願寺の家臣であった山本与右衛門多々良貞徳<sup>（きたのり）</sup>（一七二四〜九四）に養子として迎えられたことである。明和四年（一七六七）末頃に山

本家の養子となった封山は、明和七年（一七七〇）四月には西本願寺の綱所衆として新門跡（次期宗主）の文如（一七四四～九九）に仕えることとなる。<sup>⑤</sup>その後、天明六年（一七八六）閏十月に致仕するまでの十六年間、封山は二十代の末から四十代半ばまでを西本願寺の家臣として生きた。封山が文如の侍読を命じられたのは天明元年（一七八一）十月二十七日のことであつたが、義父貞徳自身は学問的な方面で勤仕した形跡がないため、封山の学識に対する寺院内での評価がたいへん高いものであつたことが窺われる。

さて、西本願寺家臣を辞してからの封山が京の油小路五條上ル上金仏町に開設したのが漢学・医学・本草学の学塾である山本読書室である。当地はもと『本朝孝子伝』の撰者として知られる藤井懶斎の居宅であつたといひ、封山はそこを拠点として市井の儒医として活動し、文化十年（一八一三）三月七日に七十二歳で生涯を終えた。山本読書室は封山次男の亡羊（一七七八～一八五九）、亡羊の次男である榕室（一八〇九～一八六四）、亡羊の六男の章夫（一八二七～一九〇三）と、歴代当主によつて私設学問所としての活動を明治期後半に至るまで継続している。ところで、この「読書室」は封山が西本願寺家臣の職を退く

にあたり、主君である文如から贈られた一堂「読書室」の名称を引き継いだものであつたとされる。松田清は、

読書室筆記の名は安永二（一七七三）年四月から始まる第二冊に付けられている。封山はこのころから斎号を読書室としたようだ。<sup>⑧</sup>

とし、また、

山本読書室は西本願寺宗主18世文如上人光暉の侍読（学問掛）であつた儒医山本封山（1742～1813）が天明6年（1786）、退任にあつて上人から与えられた学問所「読書室」に始まる。しかし、封山に日記「読書室筆記」（安永2年～天明6年、1774～1786）があるように、「読書室」の名は早くからとして使われていたようである。<sup>⑨</sup>

として、『読書室筆記』第二冊の表紙に「読書室筆記」と外題がある点に着目し、少なくとも安永二年四月の時点で封山は自身の斎号として「読書室」の称を用いていたことを指摘している。付け加えるなら、『読書室筆記』第一冊（外題「退食余興」）の安永元年十二月二十一日条に、

閑居花 廿一日読書室当座

明くるまをいかにしのひて春の日の花にこもれる宿の夕くれとの封山主催と目される当座歌会での自詠が書きつけられていることに鑑みて、封山が斎号「読書室」を使用したのは安永元年（一七七二）十二月二十一日以前に遡ることになるう。

本稿において取り上げる『読書室筆記』の書誌情報について略述する。先述の通り当該資料は全十八冊で、明和九年（一七七二）から天明六年（一七八六）までの十五年間におよぶ封山の日記である。装訂は紙縫綴の折紙列帖装。料紙はすべて楮紙。各冊の寸法は小異はあるが第一冊を以て代表させると縦十六・二×横十一・八糎。半紙本と中本のちようど中間のような書型であり、枡形本とまでは呼べないがやや特殊な縦横比となっている。第四冊のみ山水画を摺り付けた翠色表紙で、残りの十七冊はすべて柿渋を引いた刷毛目表紙である。

『読書室筆記』は一冊ごとに一年間の出来事が区切りよく書き留められているわけではないので、便宜上まずは各冊の内容をまとめておきたい。

第一冊 明和九年（安永元年）十一月十五日～安永二年三月

第二冊 安永二年四月十三日～同年九月

第三冊 安永二年秋～安永三年六月二十日

第四冊 安永三年六月二十日～安永三年十一月二十九日

第五冊 安永四年元旦～同年六月二十日

第六冊 安永四年六月二十日～安永五年一月二十日

第七冊 安永五年正月二十一日～同年九月十一日

第八冊 安永五年九月十二日～安永六年十月三十日

第九冊 安永六年十一月一日～安永七年十月二十日

第十冊 安永七年十月二十一日～安永八年十一月二日

第十一冊 安永八年十一月一日～安永九年十一月十五日

第十二冊 安永九年十一月十六日～天明元年九月三十日

第十三冊 天明元年十月一日～天明二年十月十五日

第十四冊 天明二年十月十一日～天明三年十月二十九日

第十五冊 天明三年十一月一日～天明四年九月三十日

第十六冊 天明四年十月一日～天明五年九月三十日

第十七冊 天明五年十月一日～天明六年九月三十日

第十八冊 天明六年十月一日～同年閏十月十六日

本資料は外題も各冊まちまちである。すべてを逐一記述すると煩瑣となるので整理して掲げる。

第一冊外題「退食余興」

第二冊外題「読書室筆記」

第三冊外題「読書室筆記之三 南行漫録」

第四・五・六・八冊外題「読書室筆記之四（五・六・八）行余学海」

第七冊外題「読書室筆記之七 多議篇」

第九・十八冊外題「読書室筆記之九（十八）行余漫録」

各冊の表紙や裏表紙に封山の識語や署名が記されている場合がある。識語はおおむね起筆時期を記したのみであるからここでは略し、封山の各種署名に關してのみ同様に整理しておく。

第一・二冊署名「（多々良）布制磨」

第二・五冊署名「月樹道人」

第三・十冊署名「太山々人（逸人・道人）」

第四冊署名「射水道人」

また、各冊の最終丁ないし裏表紙見返しには山本鴻堂（一八四〇～一九二二・榕室の長男）の以下のような識語を存する。

第一～六冊卷末識語「山本八世／封山先生草稿／六冊之一

（印記「鴻堂」）」

第七～十八冊卷末識語「山本八世／封山先生日記／十二冊之一（印記「鴻堂」）」

以上、『読書室筆記』の基本的な書誌情報について記してきた。近世期の日記は通例一冊ごとに一年ないし複数年分の内容が正月から十二月まで区切りよく収録されていることが多いが、この『読書室筆記』にはそうした対応関係はない。これは恐らく封山が事前に仕立てた折紙列帖装の冊子に日記を書き継いでゆき、末尾に筆が及んだ時点で次冊に移ることを繰り返した結果であろう。袋綴装ならば紙を削除して事後の調整が可能だが、折紙列帖装はどうしても自由度が低くなる。

『読書室筆記』がこのように様式的に必ずしも整っていないのは、この日記が公的な性格のものではなく、あくまでも封山の私的な記録として書かれていることを示唆する。表紙にある「退食餘興」「行余漫録」との外題も、職務外の私的なことどもを書き綴ったものであることを封山自身が強調したものであろう。とはいえ公務に關わる記述も本書には少なくないことも言い添えておかねばならない。『読書室筆記』の記載内容をあらかじめ整理すると、第一に西本願寺家臣としての業務に關わる記事、第二に諸家との交遊録、第三に読書録、第四に折々に創作された詩歌文章等の手控え、第五に天候・自身の体調・事件・災害等の諸記録の五種類におおむね分類することができる。

## 二、礪波今道・橋本経亮・上田秋成

『読書室筆記』第二冊の安永二年（一七七三）四月十六日条に次のような記事がある。

十六日 番息。巳刻、召によりて、未刻過、淇園主人を訪待りて今はむかしこれをかたりかれをいゝなとし侍て、不尽谷の主には□とらむなとかたり侍ればよくうけひ給へり。申刻はかりにかへり、荒虫をたつねて侍れば、かくら岡へ参りけるとなん。すぐに書室にかへる。例の草紙にむかふ。<sup>(10)</sup>

「淇園主人」は儒者の皆川淇園（一七三四～一八〇七）、「不尽谷の主」はその弟で国学者の富士谷成章（一七三八～一七九）で、兩人とも『読書室筆記』にはしばしば登場する。封山はこの日は勤番ではなかったものの午前十時ごろに文如に召され、午後二時過ぎに淇園と成章を訪問、午後四時ごろに「荒虫」を訪ねたが神楽岡（吉田山）に行っていて不在であったため、そのまま帰宅している。

さて、この「荒虫」は封山と同郷の高岡出身の漆工家にして

国学者の礪波今道（となみの いまみち）（一七三二～一八〇五）のことである。彼は上田秋成（一七三四～一八〇九）の友人でもあり、秋成と同様に賀茂真淵門の建部綾足（一七一九～一七四）ならびに加藤宇万伎（一七二一～一七七）に学んだ、京坂地域における県門派古学サークルの早期の一員であった。<sup>(11)</sup>「荒虫」は綾足門人として活動していた時期に主に使用していた俳号である。じつは『読書室筆記』には彼の名が頻繁に登場する。「荒虫」の名が登場するのは先に引いた安永二年四月十六日条の一度のみだが、「今道」の名は安永六年（一七七七）十二月五日条に、

五日 丁酉。番休。午後訪魚足。不遇。過淇園今道。夜帰。読独行伝。

と記されて以降、天明六年（一七八六）六月十三日に至るまで一六〇回を数える。これは『読書室筆記』に記された人物中で最多の登場回数である。

となれば封山と今道とは長期にわたり非常に親しい間柄であったことになる。両者の関係については京の梅宮社祀官で非蔵人を兼ねた橋本経亮<sup>つとむら</sup>が介在したものとする松田清の見解があるが、<sup>(12)</sup>『読書室筆記』での経亮の登場回数は確認できた限り以下の五回のみである。

午後訪義質、速水、今道、橋本。(安永八年三月五日条)

午後与内池、橋本、上男山、行路有贈答。(天明二年二月

十二日条)

肥州錢東武行。(天明五年九月十日条)

橋肥州見過。(天明六年五月二十八日条)

橋肥州見過清話。(天明六年七月八日条)

しかも最初の二つは「橋本」とあるのみなので別人の可能性もなくはない。いずれにせよ『読書室筆記』を読むかぎり、経亮と封山は少なくとも安永年間前半には特段親しい間柄であったとは考えにくい。安永年間前半といえは経亮はまだ十代後半である。他方で今道は宝暦五年(一七五五)以前にすでに上京しており、封山にとって二十歳年長の今道は同郷人として何かと頼りとなる存在であったと推察される。封山と今道は安永二年以前から経亮とはとくに関わりなく交誼を結んでいたと見てよいだろう。<sup>13)</sup>

そのことを裏打ちするかのように、今道の交友圏と『読書室筆記』に登場する人名とはさまざまに重なっている。たとえば『韻鏡藤氏伝』(安永五年刊)の著作でしられる韻学者の富森一斎の名は『読書室筆記』に十回ほど登場する。いくつか例を示

そう。

十八日。壬子。晴。番休。写古訓。八鼓後引涼于祇園。月

色殊良。曉驟雨。訪富森、中條。(安永六年六月十八日条)

十七日。丙申。陰。番休。郷信発。訪今道、逢一齋。夜読

哲宗徽宗記。(安永九年一月十七日条)

十二日。巳卯。晴。番休。午後与内池、橋本、上男山。行

路有贈答。訪富森、川口。夜聞催楽。五更帰家。国信発。(天

明二年二月十二日条)

富森一斎は素性のよくわからない人物だが、礪波今道の著作『喉音用字考』(安永六年成・静嘉堂文庫蔵)に「吾一斎翁」と言及があることから、今道の韻学上の師であった。<sup>14)</sup>右に引いた安永九年一月十七日条で今道のもとを訪れた封山が富森一斎と会っているのも、彼らの関係の近しさを示している。

さらにいえば、右に引いた天明二年二月十二日条に登場する「川口」は川口好和、「内池」は内池益謙で、どちらも今道とともに京都において旧宇万伎門下を母体とした県門派古学サークルを構成していた人物である。<sup>15)</sup>封山が今道をはじめ京での県門末流に属する人々とこのようにさまざまな接点を持っていたことは、封山の読書傾向や文学活動にも多大な影響を与えている

のだが、そのことについては第四節以降で触れる。

ところで、今道の友人にして同じ宇万伎門であった上田秋成もまた『読書室筆記』に登場する。それは安永七年（一七七八）五月二十八日条の次の記事である。

廿八日 丁亥 霽。番息。訪義質、今城、伯厚。自今城見贈秋成文及歌。帰後訪瀧子。夜雷鳴。

ここから「今城」なる人物を介して大坂住の秋成の文章と歌が京の封山に贈られていることがわかる（「今城」については第六節で検討する）。さて、歴彩館寄託の山本読書室資料中に漢詩一首、和歌二首、発句一句が認められた秋成自筆の「読書室四詠」一葉（目録番号五五七二・三）がある。すでに紹介が備わる資料であるため全文を引くことはしないが、当該詠草は明らかに安永年間から天明年間初頭頃の秋成の筆跡と判断される。<sup>(18)</sup>

封山は蘭・竹・菊・梅のいわゆる四君子に因んだ四題で諸家に詩歌を募っており、それらは「読書室四詠」と総称されている。<sup>(19)</sup> 山本読書室資料中に複数の関連資料の存在が確認できるが、そこから主な人名を拾っておくと、上述の秋成をはじめ和歌は小沢蘆庵・芝山持豊・伴蒿蹊・礪波今道・橘千蔭・海量・

義質・賀茂季鷹・三島景雄、漢詩は村瀬栲亭・皆川淇園・松平寒松・藪内宗堅・建部箕山・大菅南坡・大江玄圃・岡鳳鳴・春政美と上方のみならず江戸の文人の詠も含まれており、封山はかなりひろく詩歌を募っていた様子である。このうち岡鳳鳴自筆詠草（目録番号五五七二・二〇）に「安永乙未夏五望日」との年記があり、ここから封山は安永四年（一七七五）五月にはこうした詩歌を募っていたことがわかる。となると時期から判断して、先掲の『読書室筆記』安永七年五月二十八日条に見える「秋成文及歌」には上述の「読書室四詠」が含まれていた可能性もあろう。

山本読書室資料中にはこの「読書室四詠」を含めて秋成自筆詠草を三点見出すことができる。そのうちこの「読書室四詠」の筆跡のみが安永から天明年間初頭のものである一方、他の二点はいずれも寛政末から文化年間頃の筆跡であり、時期的には二十年ほどの隔りがある。<sup>(20)</sup> じつさい、明和九年から天明六年までの日記である『読書室筆記』に秋成の名が直接的なかたちで登場するのは、先に引いた安永七年五月二十八日条のただ一度のみなのである。

秋成と山本読書室のあいだでは寛政年間後半に些細なトラブル

ルが生じていた事実が従来から知られている。経緯としてはこうだ。経亮が山本家から借りた『出雲国風土記』を秋成に又貸したところ、経亮所蔵本と誤認した秋成が、自身の門人格である経亮のためにその『出雲国風土記』に校訂書入を行ってしまい、結果として経亮が困惑し、秋成が非礼を詫<sup>21</sup>びることとなった、というもので、一連の経緯は山本読書室旧蔵本である国立国会図書館蔵『出雲国風土記』（せ・五一）の貼紙に書かれた秋成自筆識語から知ることができる。<sup>22</sup>

この一件が起きた正確な時期は不明ながら、『出雲国風土記』の当該写本には封山息の山本世龍（一七七三〜九五）が寛政五年（一七九三）二月に筆写した旨の書写奥書が備わり、また同書に貼られた秋成識語の筆跡は寛政年間頃のものであるから、やはり寛政後半であることは動かない。安永から寛政年間後半にいたるまで山本家と秋成との関係が密接であり続けたのであれば、秋成が「多罪多罪、貧老何以贖哉」などことさらに詫<sup>23</sup>びるような文言をわざわざ書き付ける必要もなかったであろうから、やはり安永七年から寛政末頃までの二十年間ほどは秋成と山本家とは必ずしも継続して交流があったわけではなさそうである。

### 三、封山、小説を読む

前節で論者は『読書室筆記』に秋成の名が直接的なたちで登場するのは、先に引いた安永七年五月二十八日条のただ一度のみなのである」と述べた。ここで「直接的」という限定を付したのは理由はあって、じつは『読書室筆記』には秋成への間接的な言及がいまひとつ確認できるのである。それは以下のようなものだ。

廿二日 辛酉。晴。当直。読何武伝及雨月物語。淇園書及国史七冊到。

安永五年（一七七六）八月二十二日条から引いた。この日は西本願寺家臣としての勤番があったが、封山はその後『漢書』何武伝を読み、続いて読んだのが「雨月物語」である。秋成が「剪枝畸人」との筆名で世に出した読本『雨月物語』の当初の刊記には、京都の梅村判兵衛と大坂の野村長兵衛という二軒の書肆名が列記され「安永五歳丙申孟夏吉旦」との年記があった。つまり封山は『雨月物語』出版のわずか四カ月後に同書を読んでいるのである。

『雨月物語』の同時代読者に関して判明していることはじつのところ至って少ない。前川来太こと大坂の書肆伊丹屋善兵衛は、天明三年（一七八三）刊『唐土の吉野』の題辭で『雨月物語』『夢応の鯉魚』の典拠として明・馮夢龍編『醒世恒言』所収の一話を指摘している。<sup>(22)</sup> また江戸の俳人佐藤朝四は『木雁隨筆』（天明七年頃成）の中で「古今怪談雨月もの語（中略）文拙からず。をかしき本也。末に貧福論といふ論アリ。小判の精あらわれて貧福の論を能く弁へたる書方也」と記す。<sup>(23)</sup> 文化九年（一八二二）に大坂の杉野恒が著した『典籍作者便覧』に「雨月物語 五／コレハ稗官体ノ奇談ニテ手際ナレトモ妙トスルニタラス」<sup>(24)</sup>とあることもすでに知られているし、山東京伝や曲亭馬琴をはじめとする後期読本の作者に『雨月物語』が与えた影響についても種々指摘がある。<sup>(25)</sup> とはいえ、具体名を挙げることの可能な読者のうち最も早い前川来太の例すらも『雨月物語』出版の七年後なのである。となればこの『読書室筆記』の記事は、『雨月物語』出版直後の読書記録としてのみならず、『雨月物語』の読者層をより高い解像度で捉える上でも注目すべきものとなる。

ところで、『読書室筆記』安永七年十一月二十四日条には以

下の記事がある。

廿四日 庚戌。晴。当直。全前。読扨言及雙劍奇偶。

この「雙劍奇偶」は安永八年（一七七九）正月に京都の書肆菊谷安兵衛から刊行された伊丹椿園の『両劍奇遇』と見て間違いないだろう（刊記に見える年記以前に売り弘めがなされることは近世期の出版物では珍しくない）。こちらも初期読本『両劍奇遇』の出版直後の読書記録として貴重なものと言うことができる。封山は先の『雨月物語』もこの『両劍奇遇』も売り弘めからさほど間を置かずに読んでいることになり、この種の書物に対する関心は高かった模様である。

事実、『読書室筆記』には次のような記述がある。

廿六日 乙丑。晴。退食。読揚雄伝及小説。夜当直。読鈴

録。（安永五年八月二十六日条）

十九日 庚辰。晴。当直。読稗史及良方。（天明三年二月

十九日条）

前者の引用では、封山は『漢書』揚雄伝に続いて「小説」を読み、また夜には荻生徂徠の『鈴録』を読んでいる。後者では「稗史」と宋・陳自明の撰述にかかる医書で、寛永十三年（一六三六）に京都の書肆大和田意閑が和刻本を刊行している『婦人良

方』二十四卷（『読書室筆記』同年二月十五日条に「読婦人良方」とあり）を読んでいる。『読書室筆記』にはこのような「小説」の読書記録は総計八十三回、「稗史」は総計十七回確認できる。右に引用したのはそれぞれの『読書室筆記』での初例である。

ここまでの引用文からもわかるように、『読書室筆記』では書物の名称はおおむね具体的に記載されるのだが、「小説」「稗史」に関してはあえて臆化した書き方がされているようだ。これは恐らく、その通俗的かつ娯乐的な内容のために封山が個々の書名を記すのを憚ったものであろうから、これらの「小説」「稗史」はおおむね中国の伝奇小説や志怪小説、また三言二拍などの白話小説の類を指すと考えて良さそうである。<sup>26</sup>じつさいに『読書室筆記』にはその種の書物がいくつか登場する。

廿六日 乙酉。雨。当直。制香。読花陣奇言。（安永七年五月二十六日条）

この日、封山が読んだのは明代の文言短篇伝奇小説集である仙叟石公輯『花陣綺言』十二卷である。同書の和刻本は存在しないので明版（ないしはその写し）で読んでいることになろう。<sup>27</sup>

続いて天明二年（一七八二）四月二日条を引く。

二日 戊辰。晴。当直。句集覽。句授校考。読繪園。

末尾に出てくるのが明・錢希言撰『繪園』で、明末の志怪小説である。こちらも和刻本はない。<sup>28</sup>なお、『句集覽』は『読書室筆記』にしばしば登場する語句だが「得論語集覽」（安永六年一月十一日条）との文言もあることに鑑みて、恐らく松平頼寛編『論語徵集覽』二十卷（宝暦十年刊）の素読であろう。「句授校考」は「授児于孝経句読」（安永五年二月一日条）ともあるので息子の世龍（伯賢）に経書の句読を授けているものと解することができる。ちなみに安永二年（一七七三）生まれの伯賢は安永五年の時点で四歳である。

九日 己卯。晴。走診。当直。読夷堅志。奇怪多。（天明六年十月九日条）

宋・洪邁撰『夷堅志』は志怪小説集。和刻本は出ていないが、斉賢訳『夷堅志和解』（貞享三年序刊）がある。『読書室筆記』に多数ある読書記録のうち、封山の感想が記されることはごく稀で、その意味でも彼がこうした小説類の奇怪な内容を取りわけ愛好していた様子がうかがえる。

十四日 庚子。晴。当直。読田賦考及酉陽雜俎。奇怪尤甚。又看冷齋夜話。雖未脱頭巾氣有可味之氣。（安永七年十一月十四日条）

登場する書名に注解を加えよう。「田賦考」は元・馬端臨撰『文獻通考』の内、唐・段成式撰『酉陽雜俎』は元禄十年（一六九七）刊の和刻本（京都・井上忠兵衛版）、宋・釋惠洪撰『冷齋夜話』の和刻本は正保二年刊本のほか五山版などもある。注目されるのは『酉陽雜俎』に対して「奇怪尤甚」との感想を漏らしている点で、同書は随筆ながら奇談を多く含んでおり、やはり封山はそうした部分に反応しているわけである。

以上見てきたように、封山はいわゆる中国の稗官小説の愛読者であり、とりわけその奇怪な内容を読むことを愉しみとしていた。ただ興味深いのは『読書室筆記』において「小説」を読んだ記録が初めて登場するのが、封山が『雨月物語』を読んだ四日後の安永五年八月二十六日である点で、どうやら彼はそれ以降、急速に小説類にのめり込んでいったようなのである。

『雨月物語』は従来その内容から、中国小説、とりわけ明末から清朝にかけて大いに流行した白話小説に親炙した知識人層が想定読者であったと理解されてきた。しかしこの封山の例を見ると、どうやら『雨月物語』をきつかけとして、その粉本たる中国の稗官小説への興味関心が惹起される、といったケースもあったように思われる。ともあれ封山は多くの「小説」「稗史」

を継続的に読むことがじつさいに可能であったのだから、近世日本の中国小説類の受容実態を捉える上でも『読書室筆記』は資料的価値を有しているよう。

それにしても封山は刊行から間もない『雨月物語』をどのような経緯で読むに至ったのか。もちろん彼自身の興味関心に基づいて偶然同書を手に取ったのかも知れないのだが、やはり秋成と共通の友人である礪波今道の何らかの介在があったように思われる。だとすれば、封山はあらかじめ『雨月物語』の著者「剪枝畸人」が何者かを知っていたことになるう。

#### 四、封山の真淵学受容

『読書室筆記』安永六年（一七七七）六月十日条に以下の記事がある。

十日 甲辰。当直。読楊震伝。雷鳴。読小説。是日藤原宇万伎卒。

この日、礪波今道や上田秋成らの国学の師にして幕臣であった加藤宇万伎が、二条在番のため京都滞在中に客死している。封山はここにそのことを書き付けているわけだが、『読書室筆記』

においてはこうした他者の死去に関する記事は必ずしも多くはない。封山にとって宇万伎の死がそれだけの重要事であったことになろう。しかしながら、『読書室筆記』にはこの日以前に宇万伎らしき人物の名を見出すことはできず、封山と宇万伎とのあいだでどのような交流があったのかは必ずしも明らかではない。

そこで注目したいのは『読書室筆記』に賀茂真淵流の県門派をはじめとする国学書が多数見出される点である。結論から述べてしまえば、封山は当時において新興の学問であった国学をさわめて積極的に受容している。もっと言えば、封山はどうやら先にも触れた旧宇万伎門下を母体とする京都の県門派古学サークルの一員でもあったようなのである。以下、本節では『読書室筆記』に登場する国学書の分析を行ってゆく。

『読書室筆記』第二冊は先述の通り安永二年四月十三日から九月までの日録だが、その巻末の余白に次のような書目の一覧が掲げられている。

和字正濫 古言梯  
万葉考 代匠記  
冠字考

詞草小苑あやたり撰

余材抄 燭明抄

これらは契沖『和字正濫鈔』・楫取魚彦『古言梯』・賀茂真淵『万葉考』・契沖『万葉代匠記』・賀茂真淵『冠辞考』・建部綾足『詞草小苑』・契沖『古今余材抄』・下河辺長流『枕詞燭明抄』をそれぞれ指しているよう。封山はこの頃に長流や契沖から県門にいたる国学関係の書目を何らかの必要があって書き留めたようなのだが、『読書室筆記』に国学関係の書名が登場するのはこれが最初の例となる。

じつさいの読書記録でいうと、安永三年五月二日条に「冠冠辞考」とあるのが初例となる。<sup>(28)</sup>真淵の『冠辞考』は宝暦七年（一七五七）跋刊なので入手はさして難しかっただろうが、これ以後に『読書室筆記』に登場する真淵関係の著作は、いずれも封山が入手した時点では刊本のないものばかりである。以下に整理して掲げる。

○源実朝『金槐和歌集』（真淵序注解本）…安永五年三月七日  
「訪雲翼<sup>古今下巻</sup>金槐序」・安永十年二月十五日「校金槐秀逸」・同十八日「校金槐秀逸卒業」

○賀茂真淵『万葉新採百首解』…安永五年四月二十五日「附

託于吉郎。借萬葉新採百首解一冊。持帰・同五月十四日「帰路尋今城。声母伝与万葉新採解代借」同十六日「校正萬葉新採」・同六月五日「新採百首解会読」・安永七年九月二十五日「読新採解」・同十月四日「読百首解」

○賀茂真淵『加茂真淵文集』…安永五年六月二十五日「読加茂真淵文集」・安永十年三月九日「校真淵文」

○賀茂真淵『語意考』…安永五年八月二十七日「訪淇園及今城。語意考持来」・同二十九日「写語意考」・同九月一日「写意考」・同三日「写語意考」・同四日「語意考卒業」・安永七年一月四日・同六日「読語意考」

○賀茂真淵『百人一首古説』…安永六年三月七日「読真淵百人一首古説」・同八日「読古説」・同十日「読百人一首古説」・同十二日「読百首古説」・同十四日・同十八日・同二十二日「読古説」・同二十五日「読（中略）古説」・同二十六日・同四月九日・同十三日・同十九日「読古説」

○賀茂真淵『延喜式祝詞解』…安永六年八月八日「持研及祝詞解」・同九月一日「写祝詞解併会読」・同四日「写祝詞解」・同十月九日「校祝詞解」

○賀茂真淵『伊勢物語古意』…安永六年十二月二十一日・安

永七年一月十四日「読勢語古意」・同十六日・同十八日・同二十日・同二十二日・同二十四日「読古意」

『読書室筆記』に登場する順に掲げ、文言が同一のものについては適宜まとめてある。こうした未刊の真淵書のみならず、県門をはじめとする国学書全般への言及も少なくない。

○荷田在満『国歌八論』…安永三年五月二十七日「読国歌八論」  
○村上影面『采藻編』（宝暦十二年跋刊）…安永四年十一月二十七日「村上織部源影面か書ける采藻編の難弁の読侍るに」  
○建部綾足『すずみぐさ』…安永五年三月十二日「読涼艸」  
○加藤宇万伎『静舍随筆』…安永六年六月二十三日「読静舍随筆。田安公問宇万伎答也」  
○安藤為章『年山打聞』…安永九年六月十日「訪嵩溪<sup>年山打聞</sup>」

○村上影面『古今和歌集序ものところ』（明和六年刊）…天明三年三月二十一日「看古今旧情」

○荷田春満『神代東満注』…天明六年八月十三日「看神代東満注」

○荷田在満『大嘗会儀式具釈』…天明六年閏十月八日「讀大嘗会具釈」

こちらは『読書室筆記』に登場する初例の本文のみを掲げて整

理した。その時点で刊本があるものについては適宜（一）内に注記してある。『年山打聞』に関して付言しておく、本居宣長記念館蔵本に見える本奥書のひとつに、

年山打聞二巻浪華高載陽かうつせる本もて大伴蒿溪か伝え  
写せるを多々羅有香又人をやとひて写しをさむ おのれ又  
有香か本をかりてさ、なみの淡海なる故郷の家にして 安  
永庚子冬十月十一日 益謙<sup>③</sup>

というものがあつて、秋成とも親しい大坂の書家である高載陽こと高安蘆屋の筆写本を伴蒿溪が写し、それを封山（有香）が借りて写本を作成し、それをさらに内池益謙が安永九年（一七八〇）十月に筆写していたことがわかる。当該奥書と『読書室筆記』との記事とを照らし合わせてみると、益謙が借りたのは、その四カ月前に蒿溪のもとで封山が見た書物であつたことになる。益謙は先にも述べた通り旧宇万伎門下を母体とする京の県門派古学サークルの一員で、彼らがこの時期盛んに国学書の貸借を行っていた事実を改めて確認できる。

この京の県門派古学サークルの特徴のひとつとして、宣長学に対する早期からの関心が挙げられるのだが、封山もまた宣長の著作を複数読んでいた。

○『字音仮字用格』（安永五年正月刊）…安永五年九月十七日「読（中略）字音仮字用格」・同十八日「読仮字用格」

○『直毘靈』…安永七年二月二十二日・同二十四日「読直霊」

○『古事記伝』…安永八年四月十七日・同十八日「読古事記伝」出版から間もない『字音仮字用格』を読んでいる点も注目されるが、『直毘靈』と『古事記伝』はこの時期には未刊の著作で、どちらも宣長ないしその門人に伝手がなければ入手は難しかったはずである。そもそも安永年間の宣長というのはこの『字音仮字用格』と明和五年（一七六八）刊『草庵集玉簪』前編および同八年刊『てにをは紐鏡』の三点を刊行している程度で、後年のような知名度をいまだ得てはいない。それだけにこの時期に未刊の宣長著を含めてこれほど多くの関連書を読んでいた封山の国学への傾倒は単にひとわたりのものということではできないだろう。そしてそれは、彼も属していた京の県門派古学サークルの充実した書物環境があつてこそ可能なのであつた。封山が宇万伎の死をその当日に書き留めた背景には、こうした国学をめぐる人と書物の濃密な交流があつたのである。

## 五、西本願寺の万葉調

多数の国学書を読んだ封山は、その知見をじつさいに活かそうとする。その器となったのが和歌であった。先述のとおり、『読書室筆記』には封山が折々に詠んだ詩歌や文章が書き留められている。

松間月 関雎殿当座十五日

夜すから雲もかゝらぬまつの戸にあくるもおしき山の端の月  
これは『読書室筆記』第一冊冒頭で、明和九年（一七七二）十一月十五日の記事にあたる。歌題下に見える「関雎殿」とは西本願寺内にあった殿舎で、『読書室筆記』には「関雎殿当御稽古始」（安永三年春条）「関雎殿御会始」（安永六年二月三日条）「関雎殿宿題」（安永二年正月条）などとあることから、封山が仕えていた文如ならびにその父で西本願寺宗主の法如が主催する歌会が定期的に開かれていた場所のようである。封山の歌は、松の戸をしつらえた邸内から夜通し眺めていた月が朝を迎えて姿を消しつつあるのを惜しんだもので、難なく題を詠みこなした平明な作といえる。

そこから四年を経た安永五年（一七七六）、封山の詠みぶりに変化が兆しはじめる。同年六月三日条の全文を示す。

三日 癸卯。番休。与<sup>（讀）</sup>□滝氏遊嵯峨。午後驟雨。晚帰。

向而志嵐山之夕日影夏共人思者去鳧

「滝氏」は『読書室筆記』に何度か登場する人物ながら未詳。彼と嵯峨野に遊んだ封山だが、午後にはわか雨に見舞われ、晩に帰宅している。その折の和歌の表記が漢字のみを用いた万葉書にされている。訓は「むかひてしあらしのやまのゆふひかげなつともひとおもはざりけり」となろうか。万葉書自体は伝統的な和歌書法のひとつとして近世以前から存在していたもので、近世国学において提唱された和歌の復古運動とは直接的には関係がない。じつさいこの「向而志」歌も歌風自体は万葉調とはいいたいものである。ただし前節で述べた通り、封山はこの歌を詠む直前に『金槐和歌集』の真淵注解本や真淵『万葉新採百首解』を読んでおり、またこの後も真淵の著作を盛んに読み続けている。だとすれば、当該和歌は真淵が主唱したあたらしい歌風であるところの万葉調を、まずは封山なりの仕方で受け止めようとしたものと理解できる。

同年七月八日条には「月伏樓観月作歌」との題で「瓢形之天

行月越對而者不見世乃人越篠晴楚珠流」の一首が記される。訓は「ひさかたのあまゆくつきをむかひてはみぬよのひとをしのばれずる」となる。続いて九月三日条には「詠木犀花」題で「烏玉暗西行度瓢形乃月之桂乃花之香楚橋」とある。結句にやや疑問が残るが、訓は「ぬばたまのくれにしゆけどひさかたのつきのかつらのはなかくはし」であろうか。このように安永五年六月以降、封山は折々に詠んだ歌を万葉書にするようになるのだが、『読書室筆記』にはあいかわらず通常の表記の和歌も書かれているし、同年九月二十五日条に見える「秋懷作歌」題での「蟋蟀伊多久奈鳴楚金夜乃長思者吾劣目屋」は、「さりぎりすいたくななきそあきのよのながきおもひはわれおとらめや」と訓じるのだろうか、これは『古今和歌集』の藤原忠房歌「さりぎりすいたくな鳴きそ秋の夜の長き思ひは我ぞまされる」（秋上・一九六）と結句がわずかに異なるばかりで歌意も同一というほかなく、さすがに封山自身も「有類歌可除」との注記を添えている。

この事例からもわかるように、枕詞の使用などは認められるものの、歌風そのものは『万葉集』を規範としたいわゆる万葉調からはまだ幾分の距離があるようである。しかし、同年十二

月二十九日条の「環玉之年終之一夜遠毛車居者可為阿賀思杼知」（訓「あらたまのとしのをはりのひとよをもくるまるすべしあがおもふどち」）や、翌年の安永六年（一七七七）正月元旦に詠まれた「朝霞起出見者内日刺都之空尔春立下」（訓「あさがすみおきいでてみばうちひさすみやこのそらにはるたつらしも」）などは着想も表現もおおむね万葉調といってよい詠みぶりであろう。ここまで挙げて歌はいずれも私的な場で詠まれたもののようだが、安永六年二月三日条には以下のようにある。

三日 庚子。晴。当直。読王昌、劉永、張歩、李憲、彭寵、盧芳、隗囂伝。

処々春 関雉殿御会始

押並而春立下足曳山尔毛野尔毛霞棚引

この日の封山は『後漢書』を読み進め、また「処々春」題で一首を例によって万葉書にしている。「おしなめてはるたつらしもあしびきのやまにもかすみたなびく」と訓じるのであろう。詠みぶりもやはり万葉調といってよいが、当該歌は注記に「関雉殿」とあるとおり、封山の仕える文如も出席する西本願寺内での年頭の和歌御会へ出詠したものである。このほか、安永八年五月八日条には「奉寿大法皇七十初度歌」として「左

酒竹乃君之齡者万代尔蟻通奉仕万世万代尔」の一首が見える。

訓は「さすだけのきみのよはひはよろづよにありがよふつかへまつらんよろづよよろづよに」か。旋頭歌ないしは仏足石歌の形式を誤認したものかと思いが、当該和歌は当時の西本願寺宗主であつた法如に封山が奉つたものである<sup>39</sup>。

文如は公卿の柳原光綱ならびに冷泉為村に和歌を学んでおり、この時期の西本願寺内ではさまざまに歌会が催されていたようである。龍谷大学図書館写字台文庫蔵『例月兼題当座誌』は安永九年中の同寺院内での歌会記録だが、法如や文如らとともに「有香」の名で封山の詠も収録されている<sup>40</sup>。ただ、同書所収の封山の詠は、たとえば「けふよりの千世を数て引松の木高き陰にすまんとそおもへは」(正月二十二日・兼題「子日松」といったもので、万葉調の気味は何ら認められない。『読書室筆記』でも、和歌の万葉書は安永八年八月十五日条に見える「月前懷述」題での「久方之月面不愛月見者唯亡人之面影楚立」(安永六年十二月六日に没した封山の親しい友人で西本願寺家臣と思しき平匡を偲んだもの)が最後であり、これ以降、『読書室筆記』には日記中に知友などと詩歌を詠じた旨の記載はあつても、詩歌自体がほぼ書き留められなくなつてゆく。恐らくこの

頃から折々の詩歌については別記するようになったものと思しく、また封山の万葉調への向き合いかたにも変化が生じたのであろう。

ここまでの議論をいったん整理する。封山は賀茂真淵の著作に複数触れつゝあつた安永五年六月頃から和歌の万葉書を試みるようになり、同年末頃には本格的に万葉調の和歌を詠じるようになる。これ以後、私的な場面ばかりでなく西本願寺内の歌会などの公的な場でも万葉調の和歌を出詠するようになるが、安永八年後半頃にはそうした万葉調への熱意も徐々に薄れていった模様である。じつさい現存する安永九年中の西本願寺内での歌会記録に見える封山の詠は万葉調とは見なしがたい。

封山の万葉調への傾倒はこのように三年間ほどのごく短期間であつたし、彼の活動が西本願寺内においてどのように受け止められたのかについても、今のところその実態がわかる資料を見出すことができない。しかしながら、江戸の賀茂真淵が唱えた万葉調の和歌が、真淵没後ほどなくして京都の西本願寺内の人間によつて受け止められ、寺院内での歌会等で万葉調和歌が詠じられたという事実は、従来まったく見過ごされてきた。かりにそれが封山個人のレヴェルに留まるものであつたとしても、

やはり万葉調伝播をめぐる近世和歌史上のひと齣として相応の注意を払われてよい現象かと思われる。

## 六、『万葉集』の会読と建碑

真淵の著作を読み、またみずからの詠歌に万葉調を摂り入れようとしていた封山は、同時に原典である『万葉集』にも触れている。『読書室筆記』安永五年（一七七六）九月二十二日条に「写万葉五葉」とあるのがその初例で、その二日後の同月二十四日条には「写万葉四葉」とある。少し間をおいて安永六年一月一日に「読万葉」、同二日に「写万葉」、同四日に「読万葉」、同五日及び八日に「写万葉」とあるので、封山はこのころ集中して『万葉集』の書写と読書を進めたいらしい。同年三月十二日条には「午後赴万葉会」とあって、『万葉集』の会読にも参加しているようである。さらに同年九月十六日には「写古万葉」、同十九日に「写万葉」とあって、翌二十日に「万葉卒業」とあり、この日に全巻を書写し、通読を果たしたようだ。前節で見てきた安永五年以降の封山の万葉調への傾倒は、まさに彼が『万葉集』を読み、盛んに書写していた最中のことであった。

ところで、『読書室筆記』には魚足および今城なる人名が頻出する。前者はのべ三十回以上、後者は七十回以上登場する。この二名の説が加藤宇万伎ならびに賀茂真淵関係の書物のいくつかに「魚足云」「今城云」などと書入れられていることなどから、彼らもまた旧宇万伎門下を母体とする京都の県門派古学サークルの構成員であった可能性についてかつて論及したことがある。<sup>37)</sup> その時点では彼らの素性はまったくの不明だったのだが、どうやら封山が参加した「万葉会」は、この魚足と今城が主体となって開催されていたものらしいのである。

以下、『読書室筆記』の記述から、従来おぼろげであった彼らの輪郭をたどることにしたい。魚足の素性に関しては安永五年十月十六日条の「午後訪魚足、還医言」、およびその前月九月二十一日条の「周平持医言来」との記事が手掛かりとなる。同年九月二十二日条に「読行余医言」ともあるので、「医言」は香川修庵の医書『一本堂行余医言』と断じてよい。なお、同書が刊行されたのは天明八年（一七八八）なので、ここで貸借されているのは写本である。さて「周平」が持参した書物を魚足に返却しているのだから、両者は同一人物ということになる。さらに安永五年正月十日条に「内池周平諸魚江州八幡人」とあり、

同年九月十六日条に「訪内池諸魚、今城」ともあるので、魚足は先にも触れた京都の旧宇万伎門人で、近江八幡の商家に出自を持つ医師内池益謙のことと判明する。魚足説の書人に「池魚足云」と冠したものがあ<sup>38</sup>るが、内池姓を修して「池」としていた模様である。

今城に関してはやや曖昧な部分も残るが、礪波今道と同一人物である可能性がよく示唆される。まず山本読書室資料中に「今城」もしくは「となみのいまき」と署名ある自筆の和歌詠草と和文があり、ここから彼が礪波姓であったことがわかる。

じっさい『読書室筆記』安永六年三月十七日条には「郷書托今城」とあり、封山は郷里高岡への手紙を今城に託している。彼が礪波姓を名乗るのは越中国礪波郡の出身であるためだろうか、これも整合的である。さて山本読書室資料中には礪波今道が詠じた読書室四詠の自筆詠草<sup>39</sup>が現存しているが、その筆跡は今城のものと酷似する。先述の通り今道も今城も『読書室筆記』にはしばしば登場する名前で、繰り返しとなるが今道の名は安永六年十二月五日から天明六年六月十三日まで百六十回登場する。他方の今城の登場は今道よりやや早く、安永二年五月十日五月十日が初回で、最後に登場するのは天明二年十二月九日で

ある。このように登場時期に重複があることに加え、たとえば安永七年一月十二日条および翌十三日条には、

十二日 癸酉。晴。番休。上大閣埒。夜訪常盤、今城。

十三日 甲戌。雨。訪常盤、今道。当直。読西城伝。

とあり、今道と今城が同一人物であったならば、封山は同じ人物を翌日に異なる呼称で記載していることになる。ただし、『読書室筆記』において今道と今城が同日に登場することはなく、さらにいえば第二節でも引いた安永七年五月二十八日条に「自今城見贈秋成文及歌」とあって、今城は上田秋成とも相識だったようである。いまだ不可解な部分が残るため現時点では断定は控えたいが、以下、本稿ではひとまず今道と今城とを同一人物と仮定して論を進めることにしたい。ちなみに、右の引用文中に見える「常盤」は、冬虫夏草の多色刷図譜である『夏草冬虫之図』を享和元年（一八〇一）の跋を付して刊行した小野蘭山門の儒医・本草家柚木常盤（一七六三～一八〇九）である。人物考証のために論が迂回してしまったが、内池益謙と礪波今道はともに加藤宇万伎の門人であり、封山は彼らとの交流のなかで国学関係の情報や書物を得ていたことは間違いない。先に触れた封山が安永六年三月十二日に赴いた「万葉会」だが、

この前後に封山は益謙が開いていた会にしばしば参加していることが『読書室筆記』の記述から判明する。安永六年正月十一日条に「夜赴魚足会」とあるのが初回だが、この回も含めて安永六年中の月ごとの「魚足会」の開催日を整理すると以下のようになる。

正月 十二日・十七日・二十一日  
二月 一日・七日・十一日・十七日・二十一日・二十七日  
三月 十八日・二十二日・二十六日  
四月 五日・十五日・十九日・二十五日・二十九日  
五月 九日

五月九日条に「午後赴魚足会、会暫休」とあり、この日を最後にしはし休会となったようである。二年後の安永八年五月七日条に「午後魚足会」とあって一時復活した模様だが、『読書室筆記』にはこれ以降「魚足会」に関する記事はない。

さて、右に月ごとの開催日をまとめたのは、この会が安永六年の正月から五月にかけておおむね四日から十日おきに定期開催されていた事実を可視化するためである。封山が参加した「万葉会」の開催日である同年三月十二日は「魚足会」の開催ベースとはほぼ一致しており、となると封山が赴いた「万葉会」は内

池益謙邸で行われていた『万葉集』の会説であった蓋然性が高い。

また『読書室筆記』安永八年五月二十一日条に「赴今城会」とあり、同年六月一日条には「午後今道会、賜酒宴于家」、また同十二日条に「伯厚小集」ともある。伯厚は内池益謙の字だが、「伯厚会」あるいは「伯厚宅」もしくは「今道宅」での会合へと封山が赴いた旨の記事がこれ以後やはり定期的に登場する。はつきりと会説を行ったことがわかる記述としては安永九年五月三日条の「会説伯厚宅」が最後のようだが、今道・益謙・封山らが継続して行っていた会説の場で『万葉集』が読まれていたことは、西尾市岩瀬文庫に現存する山本読書室旧蔵『万葉集』版本に今城・魚足説の書入れが認められることから明白である<sup>4)</sup>。

真淵学ならびに『万葉集』に対する封山の熱量は安永年間の後半にひとつのピークを迎えたようである。じつさいこれ以後は『読書室筆記』に国学関係の書物が登場する回数は減少し、また既述のとおり万葉調の和歌を詠むことも控えるようになった模様である。しかしそれから二十年ほどを経て、封山はふたたび『万葉集』との接点を持つことになる。

『万葉集』巻十七から巻十九には、大伴家持が現在の富山県

水見市の仏生寺川流域にひろがっていた潟湖である布勢水海を遊覧した際に詠じた歌群が収められている。布勢水海は近世期には干拓等によってすでにその面影はほとんど失われていたが、享和二年（一八〇二）、湖中の孤島に比定されていた布勢の円山に「大伴家持卿遊覧之地」と刻した碑が建てられている。建碑の経緯を記した銘文を撰したのは、ほかならぬ封山であった。当該碑文によると、高岡の有力町人である服部叔信こと天野屋三郎左衛門が、かつて家持がその景観を愛した布勢水海が往古の姿をとどめず湮滅してゆくことを惜しみ、封山と相計り、また橋本経亮の協力も得て公卿花山院愛徳に「大伴家持卿遊覧之地」の九字の揮毫を請い、当地の故事を後世に伝えるべく建碑したもので、碑文の末尾には「享和二年五月十八日山本有香謹識」とある。ちなみに建碑を企てた服部叔信は護園派の漢詩人服部南郭の同族である。

この「大伴家持卿遊覧之地」碑は越中における『万葉集』関係の碑のなかでは最古のものとして知られているが、自身の郷里に関わるものとはいえ、儒医であった封山がなぜ建碑に関わったのかについてはこれまでとくに注意が払われてこなかった。しかし、叙上のように封山は安永年間後半に『万葉集』ならび

に真淵字へと大いに傾倒していたのだし、建碑に関与したいまひとりの橋本経亮との関係も、京の畠門派古学サークルを通じて交流が機縁と考えてよい。封山は京都において江戸の真淵字に出会い、同郷の今道ら同好の友人らとともに、郷里越中を詠じた『万葉集』の大伴家持らの歌群を含めて会説を行っていたことになろう。彼が安永年間後半に『万葉集』を通じて郷土を再発見した延長線上に、この享和二年の建碑があったといっても恐らく過言ではない。

この建碑が行われた翌年の享和三年末には越中の浄土真宗の触頭であった勝興寺の第十九世法薫（一七五八～一八三一）が『布施湖八勝』という書画巻を編纂している（勝興寺蔵）。巻頭に往古の布勢水海の姿を描いた原在中の絵を置き、伏原宣光の序に続いて、園基理・芝山持豊・葉室頼寿・西大路隆明・桜井供秀・堀川親実・東園基仲・芝山国豊という公家八名が「布勢湖」「二上山」など『万葉集』に登場する布勢水海周辺の八景を題に詠じた自筆の和歌があり、芝山持豊と法薫の跋を備える。附帯する目録によると外題を揮毫したのは「大伴家持卿遊覧之地」の九字と同じ花山院愛徳である。勝興寺住職の法薫（闍郁）は西本願寺第十七世法如の子息であり、封山が仕えた文如とは

血縁上の兄弟にあたる。これらの事実を考え合わせると、当該書画巻の制作にも封山の何らかの関与があつた可能性も考えられよう。じつさい原在中による布勢水海の絵には中央に布勢の円山と思しき丸い形の孤島が描かれている。

当該書画巻をもとに『布勢湖八勝』と題した小冊子が文化元年（一八〇四）春の跋文を付して出版されている。その跋文の全文を掲げる<sup>(13)</sup>。

こはこしの中つくになる雲龍山勝興寺の閨郁上人ひめおか  
れける一まきのうつしなり。かくものし給ひしよしをこの  
みちのすき人をちこちつたへきゝて、こひみんことをねか  
ふに、しはくいなみかたくて、こたひ板にはゑられたる  
なりけり。かの上人のもとめによりて駿河守昌敷つたなき  
ふむてをとりぬ。時は文化といふとしのはしまれる春にな  
んありける。

この跋文を書いたのは大炊御門家の諸大夫で、香川景樹門の桂園派歌人として知られる山本昌敷である。出版に際してこの昌敷が板下書を作成したようで、原本における各人の書の趣きは失われている。原在中の描いた布勢水海絵に関しても、原本とは落款および署名が異なり、構図もわずかに変わっているのだ、

恐らく出版に際して改めて在中が板下用に描いたものであらう。ともかくも、この享和末から文化初頭の京都ならびに越中高岡では、いにしえの布勢水海の存在がにわかに話題となっていた模様である。こうした一連の出来事の背景に、寛政以降の国学の流行とそれに伴う『万葉集』の漸進的な地位上昇を見てとることはたやすい。しかしさらにそこに、かつて封山が西本願寺内で詠じた万葉調の和歌のかそけき響きを聴きとることも、あるいは許されるのではないだろうか。

### おわりに

本稿では儒医山本封山の日記『読書室筆記』を分析対象として、彼が当時において新興の学問であつた国学を受容した、京坂の県門派古学サークルの一員であつた事実を明らかにしてきた。あわせて封山が同サークルの構成員でもあつた上田秋成の著作『雨月物語』を刊行直後に読んでいた事実を示し、小説類や国学書などの旺盛な読書活動を跡づけ、同サークル内における『万葉集』の会読に封山が定期的に参加していたこと、またそうした知見に基づいた万葉調の詠歌活動などについても検討

を行った。

ただし、以上の本稿での考察はあくまでも『読書室筆記』の一面を対象としたに過ぎないことはいちおう断っておかねばならない。今回とりあげたのは封山の国学受容に関わる論点のみであって、『読書室筆記』にはそれ以外にもきわめて多数の漢籍や医書、また多様なジャンルの和書の書名が記載されており、また漢学者や医師、西本願寺関係者など多様な人名も見える。『読書室筆記』を総体として捉えようとするならば、当然ながらそれらの論点についても十分な検討を行う必要があるのだが、今回は論者の力量ならびに準備の不足もあり、そこまで至ることができなかった。

問題を国学に限っても、安永五年（一七七六）九月十日条に「於清風樓初謁海量師」と登場して以来、封山と親しく交わった浄土真宗の僧にして賀茂真淵門の国学者でもあった海量（一七三三―一八一七）との関わりや、同年十月十日条に「夜会于酔桃舎詠片歌」などと主として建部綾足が唱えた古代歌謡の一形式である片歌を封山らが詠じている点、さらに同年十二月十日条などに「校催馬楽」とあって、古代歌謡の催馬楽の校訂を行っていたらしい点など、本稿では十分に論じることのできな

かった論点はいまだ残る。さらに言えば、『読書室筆記』には安永年間に京都で開催されていた書画展観会や奇石会に関する記事なども見える。

もとより『読書室筆記』自体かなりの分量があり、またその内容を十全に理解するためには、約七千五百点にもおよぶ山本読書室資料や、西尾市岩瀬文に現存する読書室旧蔵資料の全容、また当時の西本願寺関係の史料などをも含めて関連文献への幅広い目くばせが必要となる。今回は論点を国学関連に局限して考察を試みたわけだが、それでも見落としや過誤がある可能性は否定できない。本稿をひとまず「序説」と称したゆえんである。残された多くの課題については別稿を期したいが、すくなくとも『読書室筆記』が、安永・天明期の雅文壇の諸動向を理解するうえできわめて重要な資料であることは、以上の議論からも疑いを容れないであろう。

#### 注

（1） 山本読書室の沿革については遠藤正治『読書室2000年史』（山本読書室、一九八一）に詳しい。歴彩館寄託の山

本読書室資料に関しては、同館への寄託以前の二〇一四に松田清編『山本読書室仮目録 統合電子版』(<https://matsuda-kiyoshi.com/dokusho.pdf>)が編纂され、また松田清『京の学塾 山本読書室の世界』(京都新聞出版センター、二〇一九)では図版を示しつつ多くの資料が紹介されているほか、松田清「山本章夫筆山本亡羊伝『先人言行録』について」(『近世京都』第四号、二〇二二)など同氏による一連の研究が備わる。また文学研究の領域では神谷勝広『近世文芸とその周縁―上方編―』(和泉書院、二〇二四)が歴彩館寄託の山本読書室資料に含まれる上田秋成の和歌資料などをいくつか紹介しているほか、加藤弓枝「蘆庵門の俊秀歌人山本世竜について―本草の家平安読書室と和学―」(『東海近世』第十四号、二〇〇四)は西尾市岩瀬文庫の所蔵する山本読書室旧蔵資料に基づいて封山の息である世龍(伯賢)の歌人としての側面に光を当てている。

(2) 注1前掲松田清編『山本読書室仮目録 統合電子版』では「読書室筆記 封山草稿」、京都府立京都学・歴彩館では「(山本封山先生草稿・山本封山先生日記)」との総称で整理されている十八冊(目録番号二三四二)を本稿では『読書室

筆記』と総称する。『山本読書室仮目録 統合電子版』での目録番号は四三四二。現在、歴彩館のウェブサイト上(<https://www.archiveskyoto.jp/?p=8171>)では『山本読書室仮目録 統合電子版』において各資料に付された番号を「松田氏仮目録番号」と呼称しているが、本稿では「目録番号」と略記することにしたい。なお、上記の十八冊とは別に、『読書室筆記』と題された一冊がある(目録番号三三六九)。表紙に「読書室筆記 安永三年甲午之春」と墨書されたこの一冊は、封山が執筆した短文の文章や諸書からの抜書を主体とした雑記の類で、上述の『読書室筆記』十八冊とは資料的な性格を異にするものであると考える。

(3) 山本封山の事蹟については富士川游「山本封山先生」(『中外医事新報』三三六号、一八九四)および『高岡史料』下巻(高岡市、一九〇九)の「山本中郎」項、また注1前掲の遠藤正治『読書室200年史』、注1前掲松田清「山本章夫筆山本亡羊伝『先人言行録』について」収録の山本章夫『先人言行録』の翻字並びに注釈・解説などによったが、私に補訂を加えた部分については適宜根拠資料を注記した。

(4) 『吉益家門人録』の引用は町泉寿郎「吉益家門人録(一)」

『日本医史学雑誌』第四七卷第一号、二〇〇一）の東京大学医学図書館呉秀三文庫本を底本とする翻刻によった。なお、当該翻刻によれば『吉益家門人録』の諸本のひとつである奥田本では「中郎」の部分が「仲助」となっているようであるが、これらはいずれも封山の字である「中郎（仲良あるいは仲郎とも表記）」の誤写であろう。

(5) 注1前掲松田清「山本章夫筆山本亡羊伝「先人言行録」について」の引く山本亡羊「口上書修正稿」（目録番号二二九四・一五）に「明和四年養子罷成、翌年養子聞届有之」とあり、また同論文が紹介する山本榕室「先人履歴」（目録番号二二九四・四）の記事による。なおこれに加えて、山本貞徳筆と思しき「山本与右衛門多々良貞徳出勤控」（目録番号二二三四・二）冒頭にある山本貞徳の略歴の明和五年条に「正月越中高岡日下氏二男仲郎有香養子智二仕度段親書年行事迄差出ス」とあり、また同七年条に「四月中郎有香綱所衆二被差出新御殿付二被仰下候」とあることから、明和四年の後半には封山は山本家の養子となり、翌年正月に正式な届出が出されたこと、明和七年四月に綱所衆として文如に仕えることとなったことが改めて同時代資料から確認できる。

(6) 『読書室筆記』第十三冊の天明元年十月二十七日条に「命儲府侍読」とある。

(7) 注5前掲「山本与右衛門多々良貞徳出勤控」に「下間修理源頼孝暫浪人之内、二松庵渡江ト号シ中京姉ヶ小路柳之馬場之辺ニ手跡謠狂哥之指南シテ居住ノ嗣貞徳狂哥の門人ト成ケルニ、宝曆四五戌亥ノ比、二松庵渡江先生旧 君江婦参在テ下間修理ト旧名帰ル」云々とある。すなわち貞徳は二松庵の祖たる狂歌師下間皓々の門弟であつたようで、当該資料によれば貞徳が西本願寺に仕えることとなつたのも、皓々の手引きによるものである。京における二松庵系の狂歌師に関しては西島孜哉『近世上方狂歌の研究』（和泉書院、一九九〇）第六章や高松亮太「林鮎主年譜考」（『秋成論攷学問・文芸・交流』笠間書院、二〇一七）などに論及がある。また『敦賀郡誌』などの編著で知られる山本元（酔古堂主人）の『柿谷半月』（中村磯吉、一九一一）に記される、下間皓々の本願寺への復職に関する逸話（父が讒言により遠国追放されたが、のちに冤罪と認められ皓々が本願寺に再勤するまでの一連の経緯）は「山本与右衛門多々良貞徳出勤控」の記述とも通う部分があつて、近世上方狂歌史研究の上でも注意されてよい

だろう。なお、山本貞徳の自筆歌稿としては岩瀬文庫に『多々良貞徳和歌集』（二三・七四）および『貞徳和歌』（二三・一〇〇）の二点が収蔵されている。山本章夫「読書室年表」にも「好和歌。詠草存于家」（注1前掲松田清「山本章夫筆山本亡羊伝」「先人言行録」について）所引とあるが、現存する歌稿類はどれも組題を穩当に詠みなしたに過ぎないもので、和歌や狂歌への傾倒はあくまでも嗜み程度のものであったと見てよい。なお、注1前掲遠藤正治『読書室2000年史』が指摘するように、町版として行われていた『六要鈔』をはじめとする真宗聖教の古版の板株を西本願寺が購入するまでの経緯を貞徳が記した「本典六要板木買上始末記」（『真宗全書』続編第二十六卷所収）との記録が残る。加えて天明九年正月から寛政四年にかけて行われた礪波郡福岡の嚴照寺の僧の八藤紋付袈裟着用のは非をめぐって本願寺側と勝興寺家司らとの書状のやり取りの中に「安永年中此御寺江山本与右衛門殿を御指下し」云々とある（高島幸次編『本願寺史料集成越中国諸記』上巻、同朋舎、一九八八・六一頁）ほか、先の「山本与右衛門多々良貞徳出勤控」の記述からも、貞徳は西本願寺家臣としての業務に忠実な人物であった様子が窺われる。

- (8) 注1前掲松田清『京の学塾 山本読書室の世界』二四頁。
- (9) 注1前掲松田清『山本読書室資料仮目録（電子統合版）』（二〇一四）所収「解説 山本読書室資料について」。
- (10) 『読書室筆記』からの引用に際しては適宜通行の字体に改め、句読点を私に付した。以下も同様である。
- (11) 拙稿「礪波今道と上方の和学者たち」「礪波今道年譜稿」ともに『上田秋成の時代—上方和学研究』（ぺりかん社、二〇一二）所収。
- (12) 注1前掲松田清『京の学塾 山本読書室の世界』に今道による読書室四詠の一首を紹介する中で今道について「京都に住み、橋本経亮<sup>つねあきら</sup>を介してその親友、同郷の封山と交遊した」（二〇〇頁）とする。なお各種の辞典類が経亮の名の訓を「つねあきら」とするが、これは誤伝である。
- (13) 注11前掲拙稿「礪波今道年譜稿」参照。
- (14) 封山と経亮の天明年間以前の関係について、『読書室筆記』以外の資料に基づいて整理すると以下のようになる。  
 ○天明六年九月七日、山本封山蔵『紫女七論』を経亮が書写する（慶應義塾図書館橋本経亮旧蔵香果遺珍『紫家七論』奥書の一「此七論山本有香のもたるをかりてうつし

ぬときは久堅のあめあきらけきむつのとしなか月のならぬ  
かに南有ける／春の梅津の里なる／梅宮のうま場のかた  
はら／橘経亮」

○天明七年某月、封山が経亮を来訪（岩瀬文庫蔵『読書室  
隨筆』に詞書「立花の経亮を訪て」ある封山歌一首あり）

○天明八年正月三十日以後、天明の大火で類焼した山本封  
山のために経亮が木材を贈る（山本章夫『先人言行録』  
（目録番号一五二二）「天明大火に、家屋類焼す。経亮首  
として木材を贈られしと云」

このように、いまのところ安永年間の段階では両者にはさし  
たる接点は認められず、やはり天明五年前後から次第に近し  
い関係になっていったものと推察される。

(15) 注11前掲拙稿「礪波今道年譜稿」参照。ちなみに慶應  
義塾図書館蔵橋本経亮旧蔵香果遺珍中に藤原直養及び富森一  
斎が撰述した『十字解』なる韻字書の経亮による抜粋本を見  
出した（請求記号一三三X@一六〇⑤五一三）。拙著『橋  
本経亮旧蔵 香果遺珍目録』（慶應義塾大学三田メディアアセ  
ンター、二〇二二）解説参照。

(16) 注11前掲拙稿「礪波今道と上方の和学者たち」参照。

(17) 注1前掲松田清『京の学塾 山本読書室の世界』及び注  
1前掲神谷勝広『近世文芸とその周縁―上方編―』に紹介が  
あり、図版や翻字が示されている。

(18) この時期の秋成自筆資料として安永三年筆「阿志乃也能  
記」（大阪府立中之島図書館蔵）や天明四年秋成写「真暦考」  
（東丸神社蔵）などを参照した。

(19) 諸家の自筆資料を一括したものに「封山先生時代読書室  
四詠詩歌」（目録番号五五七二）があり、それ以外に注1前  
掲神谷勝広『近世文芸とその周縁―上方編―』が指摘する「源  
之熙詩（蘭竹菊梅）」（目録番号四〇九五）ならびに「皆川  
淇園 詠蘭・詠竹・詠菊・詠梅」（目録番号四〇九六）があり、  
加えて「読書室」との柱刻がある野紙に諸家の詩歌を後に整  
理した『読書室四詠』（目録番号一五〇三・写本一冊）がある。  
なお、これらの資料に関しては注1前掲松田清『京の学塾  
山本読書室の世界』に一部が紹介されている。自筆詠草が残っ  
ていても『読書室四詠』に採られていないものがあり、逆に『読  
書室四詠』に収録されているのに自筆詠草の存在が確認でき  
ないものもあることを言い添えておく。

(20) 「余翁翁秋冬歌 上田秋成筆」（目録番号B〇七七）及び

- 「上田秋成和歌」（目録番号五六五〇・一・六）。前者は注1  
前掲神谷勝広『近世文芸とその周縁―上方編―』十八頁に全  
文の翻字並びに図版が掲げられている。後者は「蚊やり火／  
かやり火のいふせき／庵にやとりしてあかす／ともなき夏の  
夜語り／よさい」とある一紙で、大阪府立中之島図書館柏原  
家文書中の『毎月集』に同歌が収録されている（異同なし）。
- (21) 高田衛『上田秋成年譜考説』（明善堂、一九六四）など  
に言及がある。

- (22) 中村幸彦『中村幸彦著述集』第七卷近世比較文学攷（中  
央公論社、一九八四）八三頁以下に『唐土の吉野』題辞の影  
印があり、また飯倉洋一他校訂『前期読本怪談集』（国書刊  
行会、二〇一七）に『唐土の吉野』全体の翻字が備わる。
- (23) 長島弘明『「雨月物語」における作者・書肆・絵師・読者』  
（『秋成研究』東京大学出版会、二〇〇〇、所収）の指摘による。
- (24) 引用は国立国会図書館所蔵近代複製本（〇二七・三・S  
u七三八t）によった。
- (25) 江戸の後期読本における『雨月物語』利用に関しては小  
池藤五郎『山東京伝の研究』（岩波書店、一九三五）や麻生  
磯次『江戸文学と支那文学―近世文学の支那的原拠と読本の

研究』（三省堂出版、一九四六）などの研究がある。また上  
方の後期読本に関しては横山邦治『読本の研究―江戸と上方  
と―』（風間書房、一九七四）第一章第二節その四が文化五  
年（一八〇八）に刊行された手塚兔月『夢裡往事』に『雨月  
物語』『菊花の契』の利用を指摘している。

- (26) 安永六年十二月二十四日条に「読烈女伝及小説坂東忠義  
伝」との記事があり、安永四年（一七七五）に刊行された絵  
入の通俗軍談とでもいふべき三木成久『坂東忠義伝』に「小  
説」を冠している例がある。ただし『読書室筆記』にこの種  
の通俗軍談の類が登場するのはこの一例のみであつて、封山  
が読んでいた「小説」「稗史」は、以下に述べるような中国  
小説類が大部分を占めていたと考えられる。

- (27) 『商船載来書目』によれば『花陣綺言』は宝暦十三年（一  
七六三）の船載が確認できる。大庭脩『江戸時代における唐  
船持渡書の研究』（関西大学東西学術研究所、一九六七）参照。
- (28) 『商船載来書目』によれば、『猿園』は安永三年に船載。  
注27前掲大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』参照。
- (29) 『読書室筆記』には安永二年五月二日条「読冠辞考」、天  
明五年三月八日条「看冠辞考」と「冠辞考」は三度登場する。

(30) 国文学研究資料館マイクロフィルム(三七・一八八・三)による。注11前掲拙稿「礪波今道と上方の和学者たち」でも当該奥書について触れたことがある。

(31) 注11前掲拙稿「礪波今道と上方の和学者たち」参照。

(32) 玄智『大谷本願寺通紀』巻九(『真宗全書』第三十五卷、藏経書院、一九一四)や安永九年(一七八〇)刊の秋里離島『都名所図会』巻二「本願寺」項に「閼阇殿」の名が見える。

(33) 拙稿「和歌の万葉書」(『斯道文庫論集』第五十輯、二〇一六)。

(34) 法如は宝永四年(一七〇七)生まれであるから、この安永八年の時点では七十三歳であるはずで、「大法皇七十初度」とあるのとは齟齬があるが、今はとりあえずこのように解しておく。

(35) 本願寺史料研究所編『本願寺史』(浄土真宗本願寺派宗務所、一九六八)七四頁ならびに龍谷大学大宮図書館編『本願寺宗主の向学―写字台文庫を中心に―』(龍谷大学、二〇一四)参照。

(36) 請求記号九一・二〇六・二一・w・一。写本一冊。

(37) 注11前掲拙稿「礪波今道と上方の和学者たち」ならびに

「上方の真淵門」(前掲『上田秋成の時代―上方和学研究』所収)。

(38) 東丸神社蔵『語意』(文書番号二二一七)。

(39) 「戸波今城書」(目録番号三四八二)はある親子が四季の夜を題とした発句を詠み交わしているのを羨ましく思い、自身も二句を詠じてみたがその親子の作の出来ばえには及ばない旨を記した和文で、親子というのは恐らく封山とその息世龍(伯賢)を指すかと思われる。「今成 詩」(目録番号五五七二・六)は先述した読書室四詠を詠じた和歌四首である。

(40) 「となみのいまみち 読書室四詠」(目録番号五五七二・一九)。注1前掲松田清『京の学塾 山本読書室の世界』に一部の図版と四首のうち二首の翻字が掲載されている。礪波今道の自筆資料として確実な、今のところ現存唯一の資料であることから、全文を翻字しておく。「読書室四詠(割書)「墨梅 春蘭／黄菊 画竹」／常とはにあはれと思ふ梅花誰世の春のかたみなら猿／緑なる草とみてしか韓衣もはるのものもせのあらさき花／口無の色のやしほ開はなをたれかは菊と名にやたてたる／なゆたけの枝もとををに時じくの露鴨所置條も十緒に／となみのいまみち」。翻字にあたって改行は無

視し、一首ごとに「」を挿入した。なお、注39前掲「今成詩」の今城歌四首のうち、「黄きくをよめる／山梔子の色の八しほにさく花をきくとしも誰なづけそめ覧 今城」の一首は、この今道歌と字句が極めて近く、このことも両者が同人である可能性を示唆する。

(41) 寛永二十年刊『万葉和歌集』（請求記号三五・五五）。同書については注11前掲拙稿「礪波今道と上方の和学者たち」で識語などを紹介している。

(42) 碑文については『氷見郡志』（富山県氷見郡、一九〇九）一七二頁参照。なお碑自体は現存しているが、二〇二四年一月一日の能登半島地震によって倒壊したという（二〇二四年一月十三日北陸中日新聞「国文化財の土蔵 損壊 氷見県内最古万葉石碑も倒れる（ウェブ版）」参照）。

(43) 飛騨高山まちの博物館蔵本を国文学研究資料館紙焼写真（C五二九七）にて披見。巻末に「雲龍山蔵板」とあり、勝興寺の刊行物である。

【附記】本研究はJSPS科研費3K25300の助成を受けたものである。本論文の内容は二〇二四年八月三十一日に開催さ

れた北陸古典研究会二〇二四年度上半期研究発表会での口頭発表「安永・天明期京都の古学受容―山本封山を例に―」を母体とする。席上でご意見を賜った諸氏に感謝申し上げます。調査にあたっては京都府立京都学・歴史館をはじめとする各所蔵機関より格別のご高配を賜った。深謝申し上げます。

